

## アルキノオスにおけるプラトンの問答法

岩田 直也

プラトンの「問答法」(ディアレクティケー)に関する議論は、『メノン』『パイドン』『国家』といった中期対話篇においては「仮設法」という形で表れ、『パイドロス』『ソフィスト』『ポリティコス』『ピレボス』などの後期対話篇においては「総合と分割法」として提示される。それぞれの方法論をめぐるのは、これまで多くの解釈的論争が展開されてきたが、両方法論の関係性については先行研究であまり深く論じられてこなかった<sup>1</sup>。その主な理由として、個々の方法論の具体的内容を明確化しなければ適切な比較ができないことに加えて、そもそも両方法論が根本的に異質なものと見なされてきたため、それらの関係を追究する必然性があまり意識されなかったことが挙げられる<sup>2</sup>。

本稿では、「仮設法」と「総合と分割法」が、とりわけ対象を定義する上で互いに密接に関係し合う可能性に注目する。ただし、誌面の制約のもとで、両方法論の全容を網羅的に論じることは困難である。そこで本稿は、その一端を照らし出すための手がかりとして、紀元後2世紀の中期プラトン主義者アルキノオスが示すプラトンの問答法理解に着目してみたい。アルキノオスの『プラトン哲学講義』第5章は、現存する文献のなかでも、プラトンの問答法を包括的に扱う最古の資料の一つである。彼はそこにおいて、「それぞれのもものがまさにそれであるところのもの(本質)を、上から分割や定義の方法によって、あるいは下から分析の方法によって考察する」(V. 156, 26–28)という発言を残している。彼の具体例から後者の「分析」の方法がプラトンの「仮設法」を少なくとも含んでいることは明らかであるため、この「上からの方法」と「下からの方法」の関係性の考察は、プラトンの両方法論の関係性を考察する上で有益なのである。

もっとも、アルキノオス自身の解釈をどこまでプラトン理解の基礎として真剣に受けとめるべきかは、慎重に検討されねばならない問題である。だが本稿の狙いは、彼のテキストに依拠してプラトンの解釈を確定することではなく、そこに見られる「上からの方法」と「下からの方法」の区別という視点を一つのインスピレーションとして用い、プラトンの中期対話篇から後期対話篇にかけての両方法論の関係について再考を促すことにある。興味深いのは、アルキノオス自身が、プラトンにおける「分割」の方法を『国家』の魂の三分説によって説明し、「分析」の方法を『パイドロス』の魂不死論証に即して論じる

<sup>1</sup> Benson 2010; 2015, 269 n. 86; Kahn 1996, 298–300 らは、「仮設法」と「総合と分割法」の連関を指摘しつつも、その詳細について論じてはいない。

<sup>2</sup> Hackforth 1952, 135 n. 1; Robinson 1953, 70; Stenzel 1940, 107–8.

など、中・後期対話篇間に大きな断絶を見出していないという点である。では、アルキノオスの議論を手がかりに、プラトンの「仮設法」と「総合と分割法」の間にはどのような相補的關係を見出し得るのだろうか。本稿では、アルキノオスにおける「上から」と「下から」の定義探求のあり方を比較検討し、プラトン自身の両方法論がどのように結びつき得るのかについて、一つの解釈可能性を提示したい。

## 1. 「分析」の方法

アルキノオスは、問答法を論じるにあたり、「分割と定義」の方法について議論した後、「分析」の方法を議論しているが、ここでは先に「分析」の方法を検討する。この「分析」の方法がプラトンの「仮設法」と密接に関連づけられているためである。

「次に、分析（アナリシス）には三つの種類がある。一つは感覚的事物から第一の思惟的对象への上昇であり、他の一つは証明された事柄や証示された事柄を通じた、論証されえない無媒介的な諸命題への上昇であり、もう一つは仮設から無前提の諸原理〔始原〕へと遡ってゆくものである。

さてまず、第一の分析は次のようなものである。たとえば、われわれが肉体にまつわる美から魂のうちにある美へと美を追い求め、そしてその美からもろもろの営みのうちにある美へ、次にはその美からもろもろの法律のうちにある美へ、さらには「美の大海原」へと、そのように美を追い求めて、ついには美そのものを目にするに至るような場合である。

また、分析の第二の種類は、次のようなものである。すなわち、探求されるべき対象を仮定して、〔それが成立するためには〕何がそれに先立つ事柄であるかを考察し、そしてそれらを、より後なるものからより先なるものへと、第一の同意された事柄に到達するまで遡りつつ、論証せねばならない。そしてその事柄から出発して、探求されるべき対象へと、それらを結合するような仕方でわれわれは下降してゆくであろう。（中略）

また、仮設から出発する分析とは以下のようなものである。すなわち、なにかを探求しようとする人は、当のかのもの〔探求すべき事柄〕を仮設し、次にその仮設された事柄に対して何が整合的に帰結するかを考察する。そしてその後、もしその仮設について合理的説明を与えねばならないならば、もう一つ別の仮設を立てて、今度は先に仮設された事柄がその別の仮設に対して整合的に帰結するものであるかどうかを探求する。そしてこの手続きを、なんらかの無前提の始原に到達するまで、繰り返す行なうのである。」（V. 157, 11–43, 久保訳<sup>3</sup>）

---

<sup>3</sup> アルキノオス『プラトン哲学講義』（中畑 2008）。底本は Whittaker 1990.

まず注目したいのは、アルキノオスの第二・第三の「分析」に関する記述から、ここでいう「分析」がプラトンの中期対話篇における「仮設法」と同定されている点である。たしかに、第二の「分析」の具体例（中略箇所）は『パイドロス』245c–246a で論じられる魂の不死証明を参照しており、そこでは「仮設法」を明示的に使用してはいない。しかし、第二の「分析」にある「論証されえない無媒介的な諸命題への上昇」や「第一の同意された事柄」への逆行、さらに第一原理からの下降という過程は、『国家』の「線分の比喻」に登場する仮設法の方法論（VI. 511b–c、VII. 517b–c）をはっきりと想起させる。また、第三の「分析」に関しても、措定した仮設から整合的に帰結する事柄を考察し、より上位の仮設を立てて「無前提の始原に到達する」という叙述は、『パイドン』における「仮設法」（101d–e）への明確な言及と読めるだろう。

アルキノオスが「分析」の方法と「仮設法」をこうして接続している点は、そもそもプラトン自身が「分析」（ἀνάλυσις）という言葉に対話篇で一度も用いていないことを踏まえると、いっそう興味深い。とはいえ、プラトンがギリシア数学に由来するこの「分析」の方法を知っていた可能性はきわめて高い。実際、ディオゲネス・ラエルティオスやプロクロスによれば、プラトンは同時代の数学者であるタソスのレオダマスにこの分析法を教えたと伝えられている<sup>4</sup>。また、紀元前 5 世紀後半にアテナイで活動したキオスのヒッポクラテスが、幾何学的分析法を用いて「立方体倍積問題」を二つの比例中項の問題に還元したことも知られている<sup>5</sup>。

幾何学的分析法は、「分析」（ἀνάλυσις）と「統合」（σύνθεσις）という一対のプロセスから構成される。まず「分析」では、証明すべき命題が真であると仮定し、そこから逆向きに前提を求める演繹的推論を行う。そして、最終的に、もともと証明すべき命題とは独立に証明できるか、あるいは自明な命題に行き着けば、こんどは「統合」の過程で逆の順序をたどって当初の命題を証明できる<sup>6</sup>。また、分析の帰着点が未証明の命題であっても、そこから統合を行えば、当初の問題の証明を別の問題へ還元できる。こうした「分析」が演繹的かどうかは議論があるものの<sup>7</sup>、現存する幾何学的分析法の事例から見れば、

<sup>4</sup> D.L. III.24 (Marcovich 1999, 207.12–15); Procl., in *Euc.*, 211.19–23 (Friedlein 1873).

<sup>5</sup> Knorr 1986, 22–4. Saito 1995 は、アルキメデスの『球と円柱について』II.1 において、与えられた円錐もしくは円柱と等しい球を発見する問題がヒッポクラテスの立方体倍積問題の解法に基づくと論じている。

<sup>6</sup> 幾何学的分析法に関する記述として現存する最古の資料は、紀元後 3 世紀末のアレクサンドリアのパッポスによる『集成』第七巻冒頭における記述である (Hultsch 1877, VII. 634.3–636.14)。

<sup>7</sup> Cornford 1932, 46–8 はここでの「分析」の逆行的な推論過程が直観的で非演繹的なものだと述べる。対して、Robinson 1936; Cherniss 1951, 414–9; Gulley 1958 らはそれが演繹的であると反

演繹的な性格をもつ可能性が相当に高い<sup>8</sup>。

プラトンの『メノン』 86c–89c における「仮設法」は、幾何学的分析法に基づくとこれまで多くの研究者（筆者自身を含む）が指摘してきた<sup>9</sup>。たとえば「徳は教えられるか」という問いは、より基本的な「徳は知識であるか」という問題に還元され、そこからさらに「徳は善である」という命題へと演繹的に進んでいる。こうした『メノン』における「仮設法」は、アルキノオスが言う「下から分析の方法によって考察する」過程と密接に関わっているように思われるが、興味深いことに、アルキノオス自身は『メノン』を一切論じていない。

その一方で、アルキノオスの「分析」論が特徴的であるのは、『パイドン』における「仮設法」との関連を強調している点である。実際、現代の研究では、『パイドン』の「仮設法」と「分析」との関係については、あまり取り上げられてこなかった<sup>10</sup>。というのも、『パイドン』で措定される仮設（「アイデア F が存在し、各事物が F であるのはアイデア F を分有しているからである」というアイデア原因論<sup>11</sup>）は、「魂は不滅である」という結論から演繹的に導かれた前提とは見なしにくく、しかもテキスト中ではソクラテスが仮設を置く過程をほとんど説明していないからである。一見すると、想起説や魂の不滅を論証するうえで、理由もなく導入されたようにも見える（92d7, 100b5–6）。

だが、アイデア仮設を措定する根拠は文脈から再構成しようと、私は考えている。想起説の議論にも多くの検討余地はあるが、ここでは「仮設法」が正面から取り上げられる原因論の文脈（95e–102a）に即して話を進めよう。ポイントは、アイデア原因論が「最も強力な」

---

論している。

<sup>8</sup> 幾何学的分析法の実例として、パッポス自身の例である『集成』 VII.107 がよく取り上げられるが（Behboud 1994; Heath 1908, vol. 1 141–2）、この例での「分析」過程は明らかに演繹的である。

<sup>9</sup> ここでの幾何学問題についての詳細は Iwata 2015、哲学問題の詳細については Iwata 2016 を参照。

<sup>10</sup> 唯一の例外は Sayre 1969, 15–40 であるが、彼の解釈は、ある論証の結論とその前提が論理的同値になるという幾何学的分析法の一つの論点を中心に展開するものである。しかし、『パイドン』におけるアイデア仮設が何であれ、その結論とアイデア仮設が論理的同値であると想定することは困難である。

<sup>11</sup> 『パイドン』において措定される仮設は「もろもろのアイデアが存在する」という存在命題のみである、という解釈もある（Hackforth 1955, 138–9; Kanayama 2000, 51–60; Robinson 1953, 126–7; Van Eck 1996, 214–17 and 220–1）。だが、100a3–4 においてその仮設が「最も強力」（ἐπρωμενέστατον）と言われていることを考慮すると、単なる存在命題が何と比較してそれ程強力なのか説明困難である。ここでの仮設をアイデア原因論も含むと考える解釈者らは、Bailey 2005, 107–9; Bluck 1955, 164–6; 1957, 23; Bostock 1986, 159–60; Gallop 1975, 179; Rowe 1993a, 51–3; 1993b, 242.

(ἐρρωμενέστατον) 仮設として置かれる理由に注目することである。それは、万物の存在や生成消滅の原因を問う際に、自然学者たちの機械的原因（物理的諸要素）ではなく、アイデア原因論がはるかに一貫した説明を提供するからだ<sup>12</sup>。たとえば、ある花が美しく見えるのは、多彩な色をもつからだという説明だけでは、その事象の本質的な要因を示せない。実際、同じ色彩でも状況や人によっては醜く感じられることがある。これに対し、アイデア原因論は、その花が〈美〉のアイデアを分有している以上、必ず美しいという形で一貫した説明を与えられる。そうした点で、アイデア原因論は自然学的な物理要因に比べて、はるかに強固で包括的な理論なのだ。

このアイデア原因論の説明方式は、「あるものが美しいと判断されるのは〈美〉のアイデアを分有しているからだ」と述べるだけで、情報皆無だと批判されるかもしれない。しかし〈美〉のアイデアは、あらゆる美しい事象の本質を示す定義に相当し、本来、それらがなぜ美しいのかを説明するための情報源となる存在である。たしかに、『パイドン』でアイデア原因論が導入される箇所では、それぞれのアイデアが何であるのかについて定義は示されていない。だが、そこでは魂の不滅を論証するという差し迫った文脈上、その定義づけが必要なかったにすぎず、アイデア原因論自体が形式的な役割にとどまるわけではない。実際、『国家』533c-534c では、仮設から出発して第一原因である〈善〉のアイデアに上昇する哲学的問答法の過程が、同時に各アイデアの知や定義を獲得する過程であることが明言されている。

こうした見方をとると、アルキノオスが『パイドン』の「仮設法」に即して論じている第三の「分析」の方法は、幾何学的分析法のように「結論から前提へと演繹的にさかのぼる」仕方とは異なるものだと考えられる<sup>13</sup>。実際、アルキノオスの記述が焦点を当てるのは、『パイドン』101d3-8 における「既存の仮設を検証し、より上位の仮設を指定する」過程であるが、ここでのいずれのステップも単なる演繹的推論に基づくとは言いがたい。それは、先に論じた「ある仮設がなぜ最も強力であるかを吟味する」問題意識に沿った、より柔軟な検証プロセスを含んでいるからだ。具体的には、ある一群の事例を一貫して説明できる仮設を立てたうえで、その仮設を別の同種の事例群にも適用できるかどうかを検証する段取りが想定される<sup>14</sup>。そして、より根源的かつ包括的な説明を要する場合には、

<sup>12</sup> 〈善〉原因を中心とした三つの原因論の関係については Iwata 2021 の中で詳しく論じている。

<sup>13</sup> Boys-Stones 2017, 407 は、幾何学的分析法がこの第三の種類に対応すると述べている。その理由は、仮設からの帰結が偽の場合は、背理法によりその仮設が偽であり、それが真の場合は、その逆向きの推論によって仮説が真であることを示すことがこの箇所の内容と考えているためである。しかし、その解釈はアルキノオスがここで参照する『パイドン』101d3-8 と整合的ではない。

<sup>14</sup> 『パイドン』101d4-6 における記述は「仮設からの帰結が互いに調和 (συμφωνεῖ) するかしないか考察する」とあり、ここでの「調和」の意味をどう解釈するにせよ、何故帰結同士の

さらに上位の仮説を立てる。こうした過程は、単純な演繹とも帰納とも違い、複数の事例間で適切に通用する説明を「試行錯誤のうちに見いだしていく」推論形態を含んでいると言えるだろう。

このプロセスは、現代的な視点から見ると、いわゆる「アブダクション」や「最善の説明への推論」に近いとも言える。ただし、現代的なアブダクションは、しばしば、一定の事例を最もよく説明する前提命題を単に採用もしくは正当化する推論様式として論じられ、説明すべき事例の包括性はオプション扱いされることが多い。これに対して、プラトンの仮設法は、同種の事例をいかに整合的に説明できるかを繰り返し点検しながら、網羅的にそれらの事例をカバーする形で仮説を精緻化していく点に特徴がある。さらに、異なる種類の事例を説明する複数の仮説を横断的に比較・検証することで、より根源的かつ内的整合性の高い定義や原理を段階的に探り当てようとするアプローチでもある。こうした方法は、単なる「推測」や「最善の説明」にとどまらず、最終的にはあらゆる現象に通底する普遍的な原理を——対話篇内で厳密に定義されたわけではないとしても——徐々に浮かび上がらせていく試みと位置づけることができよう。

ここで、第一の「分析」としてアルキノオスが挙げる「感覚的事物から第一の思惟的对象への上昇」（『饗宴』210a–211d の「美の階梯」）と、先に述べた原因を探求する推論過程が同一なのではないか、という反論があるかもしれない。しかし、多くの研究者が同種の方法論とみなす『国家』や『パイドン』における「仮設法」の過程を、アルキノオスが第二と第三の「分析」としてあえて区別している事実を踏まえれば、第一の種類もそれらと密接に関連していると見ることは、決して不自然ではない。

では、アルキノオスによる「分析」の方法としての「仮設法」を改めて整理しよう。アルキノオスにとって「分析」とは、論証の結論や個別的な事象から、それらのより基本的な原理や原因を発見し、そこへと遡っていく、いわゆる「下からの」方法を意味する。そして、その逆行的な推論が幾何学的分析法のように演繹的かどうかは、本質的な問題ではない。実際、『メノン』の「仮設法」がアルキノオスの議論の俎上に載っていないのも、この点と関係する。当該対話篇では、詳細にテキストを読み込めば仮設特定のための逆行的推論が潜んでいることが分かるものの、表面的には「徳は善である」という仮説を単に設定し、その仮設から「徳は教えられうる」という結論を導く過程に主眼が置かれているからである。

もちろん、幾何学的分析法と同様に、「仮設法」にも、より基本的な前提から結論を導

---

関係が問題になのか議論になっている。しかし、少なくない研究者が、実際には仮設からの帰結とその他の命題の間の調和の問題だと解釈している（Gallop 1975, 166; Robinson 1953, 133; Rowe 1993b, 225）。そのことを踏まえると、アルキノオスが「その仮設された事柄に対して何が整合的に帰結するか（ἀκολουθεί）を考察する」とのみ述べ、帰結同士の関係に触れていないことは注目されてよい。

く順行的な「統合」の過程が存在する。また、仮説を検証するにあたっては、そこから導かれる帰結を検討する形で、同様に下降の過程をたどることになる。それでもなお、アルキノオスは、「仮設法」の本質が「分析」の方法に見られるような、より根本的な原理や原因を発見していく上昇の過程にこそあると考えたのである。

## 2. 「分割」の方法

次に、アルキノオスがそれぞれのものの本質を「上から分割や定義の方法によって」(V. 156, 27) 考察すると述べる際に想定している内容を検討しよう。具体的には、以下のように述べられている。

「そこでまず、分割（ディアイレシス）とは、類の種への区分であり、また全体の部分への区分である。たとえば、われわれが魂を理知的部分と情念的部分に、さらにまた情念的部分を気概的部分と欲望的部分に区分する場合のように。（中略）

ところで、それぞれのものがその本質においてまさにそれであるところのものを識別するためには、まず類の種への区分を用いねばならない。だが、それは定義（ホロス）なしにはなされえない。そして定義は、次のような仕方で分割から生み出される。すなわち、まずその定義のもとに含まれようとする事物の類を——たとえば、「人間」の定義の場合であれば「生きもの」の類を——把握せねばならない。次にその類を、それに近接する種差に即して——たとえば、「理知的なもの」と「非理知的なもの」、さらに「死すべきもの」と「不死なるもの」へと——区分し、もろもろの種に到るまで下降せねばならない。かくして、近接する種差が類に結びつけられるならば、それらからなる「人間」の定義が得られる。」(V. 156, 34–157, 10)

まず確認したいのは、アルキノオスが「分割」と「定義」を二つの独立した方法と見なししているのかどうかである。たとえば、紀元後1世紀後半のプルタルコスが「定義の能力は、その親近性のために、普遍のものと分割不可のものを愛し、逆に、分割の能力は分割可能なものによって個物の方へ向かう」と述べ（『魂の産出について』1026c–d）、定義と分割をそれぞれ普遍と個物という正反対の方向に進む一対の方法として捉えていた。しかし、アルキノオスの場合、定義は分割によって得られる付随的な成果として描かれているように見える<sup>15</sup>。「それは定義なしにはなされえない」(V. 157, 3–4) という一節は、一見すると「類から種への分割には定義（の方法）が必要だ」と主張しているかに読めるが、文脈から判断するに、ここで「それ」（τοῦτο）が指すのは「それぞれのものがその本質におい

<sup>15</sup> Boys-Stones 2017, 406. 他にも Dillon 1993 はその注釈において 'division, leading to definition' と言い換えている。

てまさにそれであるところのものを識別する」ことだと考えられる。つまり、分割そのものに定義の手続きが必須というよりは、最終的にそれぞれのものの本質を識別するためには定義が欠かせない、という意味である。

具体的に言うと、「生きもの」を「理知的なもの」と「非理知的なもの」に分割し、さらに「理知的なもの」を「死すべきもの」と「不死なるもの」に切り分けた末に、それらを結びつけて「死すべき理知的な生きもの」とすることで「人間」の定義が得られる。こうしてはじめて「人間」の本質が識別されるのであって、定義という方法は、分割から得られた要素を組み合わせることで成立すると言える。ここで「定義」は、分割とは独立した別の方法というより、分割の過程を踏まえて最後に到達するものとして示されている。

一方、プラトンが「総合と分割法」という新たな問答法を定式化したのは、おそらく『パイドロス』265c-266c が初出である。この箇所ではプラトンは、「ものごとをその自然本来の性格に従って、これを一つになる方向へ眺めるとともに、また多に分れるところまで見る」(266b5-6、藤澤訳)と述べ、明らかに一対の方法として言及している。伝統的なプラトン解釈では、「総合」は定義対象が属する類を特定する過程、「分割」はその類を最下位の種にまで順次区分する過程とされ、それによって対象の定義が得られるとされる<sup>16</sup>。すると、類を特定する「総合」の過程が「一つになる方向へ眺める」過程に対応し、類を種に「分割」する過程が「多に分かれるところまで見る」過程に対応することになる。

しかし、この解釈には問題がある。というのも、直前の箇所では述べられた「総合」とは「多様にちらばっているものを総観して、これをただ一つの本質的な相へとまとめる」(265d3-4) ことであり、その目的は「ひとがそれぞれの場合に教えようと思うものを、ひとつひとつ定義して、そのものを明白にするのに役立つ」(265d4-5) とされているからだ<sup>17</sup>。たとえば、「人間」の上位類として「生きもの」を特定するだけでは、「多様にちらばっているものを総観」することがなぜ必要であるのか説明されないし、そもそもそれだけでは「人間」を「定義して、そのものを明白にする」には不十分である。よって、この記述に照らすと、「総合」には単なる形式的操作以上の、本質的な役割があると考えざるを得ない。

アルキノオス自身は、「総合」という言葉を用いてはいない。「人間」の場合は「生きもの」を特定する必要があるとも言及しているが、それを「総合」と呼ぶかどうかについてはテキストに根拠がないし、類の特定だけで対象を定義したとも述べていない。では、

---

<sup>16</sup> Cornford 1957, 170 and 184-7; Dorter 2006, 260; Griswold 1986, 175 and 178-81; Guthrie 1962, vol. 4 427-31; Hackforth 1952; Nehamas and Woodruff 1995, xxxii; Rowe 1986, 200; Waterfield 2002, 99-100; White 1976, 120.

<sup>17</sup> Cf. Hayase 2016, 113-23. しかし、「分割」過程を伴う「総合」の場合、Hayase 2016, 134-5 は、その「分割」過程全体が「総合」の過程でもあると論じているが、その解釈に基づく「総合」と「分割」が一対の過程であるという 266b5-6 の記述と整合させることが困難に思われる。



この点をどう解釈すればよいだろうか。Boys-Stones は、アルキノオスの文脈を踏まえるなら、類を種に分割するだけでは定義には至らず、何らかの「総合」の過程が必要なのだと論じる。すなわち、「総合」とは、類とそれにともなう諸種差を組み合わせ、一つの定義を形成する手順であるというわけだ<sup>18</sup>。確かに、『ソフィスト』224c9 で、ソフィストの技術を第二分割した末尾に、類と種差を順につなぎ合わせて定義を「総合しよう」(συναγάγωμεν)と言及する場面がある。しかし、『ソフィスト』では、類と諸種差を分割した順序そのままですなげただけで、ここに『パイドロス』で言うような「分割」と対をなす何か働いているわけではない。

さらに、アルキノオスが分割後の最終的な定義を得る段階で「近接する種差が類に結びつけられる」(συντεθείεν, V. 157, 9)と述べることに注目したい。ここで使われているσυντίθημιは、幾何学的分析法における「分析」と対になる「統合」(σύνθεσις)の動詞形である。直後に「上昇」の過程としての「分析」の方法が分類される文脈から考えると、この語が「下降」の過程を表す「分割」の対概念として使われているとは考えにくい。実際、第二の種類「分析」を論じる際には、第一原理から出発し「探求されるべき対象へとそれらを結合するような仕方でわれわれは下降してゆく」(κατελευσόμεθα συνθετικῶ τρόπῳ)と述べられており、συνθετικὸς τρόποςが下降過程を示すことが分かる。しかもこの箇所は、『国家』511bにある「線分の比喩」を想起させる。そこでは、最高原理である〈善〉のイデアに到達した後、「こんどは逆に、始原に連絡し続くものをつぎつぎと触れたどりながら、最後の結末に至るまで下降して行く」と説明されるが、言葉として「統合」(σύνθεσις)は出てこないものの、同様の下降過程が明示されている。

このように考えると、アルキノオスが述べる「近接する種差が類に結びつけられる」という操作は、対象を「上から」眺める「分割」の一部に含まれるか、もし区別するとすれば、彼が冒頭で言う「定義」(ὀριστικῶς)の方法として把握されるべきだろう。

これに対し、Dillon は、アルキノオスがプラトンの「総合」を「分析」と呼んでいるのではないかと主張している<sup>19</sup>。Dillon はその論拠を深く検討しているわけではないが、もし「分割」と対になる「総合」の過程をアルキノオスが念頭に置いていたとするなら、むしろそれはより妥当なプラトン解釈かもしれない。なぜなら、もし「分割」が各対象の本質を「上から」考察する方法だとすれば、「分析」に相当する「総合」は「下から」対象をとらえる手順になり、対象の定義を把握する上で実質的に重要な役割を担うからである。

実際、アルキノオスは第一の「分析」として『饗宴』の「美の階梯」を挙げる。そこで「感覚的事物から第一の思惟的对象への上昇」という過程は、以下に引用する『パイド

<sup>18</sup> Boys-Stones 2017, 405.

<sup>19</sup> Dillon 1993, 72.

ロス』の記述とよく呼応している。

「人間がものを知る働きは、人呼んで〈実相〉(エイドス)というものに即して行われなければならない、すなわち、雑多な感覚から出発して、思考の働きによって総括された (*συναϊρούμενον*) 単一なるものへと進み行くことによって、行われなければならないのであるが、しかるにこのことこそ、かつてわれわれの魂が、神の行進について行き、いまわれわれがあると呼んでいる事物を低く見て、真の意味においてあるところのものの方へと頭をもたげたときに目にしたもの、そのものを想起することにほかならないのだから。」(『パイドロス』249b6-c4、藤澤訳)

ここで語られるように、多から一へと向かう過程は、265d3-5 で定式化される「総合」の過程をすでに先取りしていると言える<sup>20</sup>。こう見るなら、「総合」は単に定義対象の属する類を特定するための形式的操作ではなく、個別事例を包括的に検討して本質的な特性を抽出し、それらをまとめ上げる手続きであり、定義という結論に直結する実質的な方法となる。すると、第三の「分析」として先に論じた『パイドン』の「仮設法」——同種の個別事例を一貫して説明できるような定義仮設を立てる上昇的プロセス——と、事実上同じ構造だと理解することも可能である<sup>21</sup>。

ある対象を定義しようとする場合、まず同種と思われる多様な個別事例を幅広く検討し、それらに共通する本質的特徴を抽出してひとつの定義へとまとめ上げる必要がある。プラトン後期対話篇で提示される「総合と分割法」のうち、前者の「総合」はまさにその過程を担うものであり、複数の事例から本質を抜き出す点で、中期対話篇の「仮設法」の上昇過程と多くの要素を共有している。つまり、「もしこれらの事例が同じ性質をもつと

---

<sup>20</sup> Cf. Yunis 2011, 146.

<sup>21</sup> この解釈に基づく「総合」の過程は、初期対話篇におけるソクラテスの定義獲得の方法とも緊密に関連している。とりわけ、中期対話篇における「仮設法」との接続を考える際には、ソクラテスがしばしば前提としている「定義の知識優先性の原則」が重要な視点を提供するからである。周知のように、ソクラテスは「われわれがFとは何かを知らない限り、ある個別事例がFに属するかどうかも知り得ない」と考えていたと推測される。すると、定義を考察する際の出発点として提示される個別事例は、実際には「仮にそれがFとしたら」という前提にすぎず、そこで得られた定義も依然として仮設の域を出ない。したがって、個別事例から出発して一応の定義を成立させたとしても、それが即座に確実な知とはならず、さらに上位の仮設へ段階的に遡り、ついには疑い得ない第一原理に到達するまで検証を重ねる必要がある。こうして最上位の原理との整合性が完全に確立された段階で、はじめてそれらは全体として統一的かつ確固とした知へと転化するのである。中期プラトンの文脈において「仮設法」がこうした上昇・下降の両過程と結びつくのは、まさにこの点にこそ由来すると言えよう。

したら」という仮定の下で探求を始めて、さらにそれを別の事例にも当てはめ、うまく説明できるかどうかを試行錯誤することで、定義を少しずつ精緻化していくわけである。

しかし、この「総合」によって定義を導き出しただけでは、その定義が同系統の他の対象とも区別できるか、どの範囲まで整合的に適用できるかは十分に明らかにならない。たとえば、「恋する人」という対象の定義を確立しても、それと類縁関係にある「占い師」や「詩人」などと比べると、具体的にどう異なるのかが不分明なままだ。そこで必要になるのが、「分割」と呼ばれる方法である。より広い類（たとえば「狂気」）から下位の種差へと区切り、複数の種を対比しながら、その定義がどこに位置づけられるかを体系的に示す。ここで定義した対象が他の近縁対象と適切に区別され、しかも多様な個別事例を網羅的に説明できるなら、その定義が妥当であることを明確に提示できる。すなわち「分割」は「類を種差で切り分けることで定義を発見する」方法というより、「総合」で得られた定義をより広い対象との比較・分類を通して裏づける教示的な役割を持っているのである<sup>22</sup>。

なお、分割の過程において「占い師」や「詩人」のような近縁対象と区別するためには、必ずしもそれらを完全に定義しておく必要はないが、少なくとも探求対象との違いを示す要点となる種差を把握しておかねばならない。したがって、対象同士の相違を明確に示すには、ある程度の「総合」を経てそれぞれの特徴を押さえておくことが要請される（cf. 『ソフィスト』267a-b）。

さらに、この「分割」による検証の過程は、先に論じた仮設法における「仮設から結論を導く下降プロセス」と密接に呼応していると考えられる。仮設法では、一度立てた仮設（定義）が説得力をもつかどうかを、下方へ適用して個別事例をどこまで包括的に説明できるかを検証する。そして、もし不備が見つければまた新たな仮設を立て、さらにはより上位の仮設に遡って再吟味するという往還が必要となる。これに対し、「分割」では、上から下へと類を区切りながら定義を当てはめ、近縁の対象群との区別や整合性を確かめていくことが中心的な手順となる。とはいえ、その目的は同様に、探求対象の定義をいっそう確固たるものへ高めることにある。

こうした重層的な点検作業によって、定義は仮設的な不安定さを脱し、内的整合性と包括性を備えた理論的基盤へと徐々に洗練されていくのである。すなわち、「総合と分割法」は互いに補完的な役割を果たすものであり、「総合」が個別事例を下からすくい上げて定義をつくり上げるなら、「分割」はより広い類や近縁の種との比較を通じて、その定義の適切さを検証し、対話相手に教示する機能を担っている。そして、この「分割」の下降的アプローチが、仮設法における仮設の適用・確認のプロセスと並走する形で機能する点こ

<sup>22</sup> 『ソフィスト』における「分割」過程が、「ソフィスト」の定義を発見する過程ではなく教示的な過程であるという見解については、Iwata 2024 参照。

そ、両方法論の本質的な親和性を示していると言えよう。

### 3. おわりに

ここまで見てきたように、プラトンの「仮設法」と「総合と分割法」は、定義を探求するうえで相補的な関係にある。アルキノオスが「仮設法」に該当するものを「分析」として上昇の側面から捉え、「分割」の方法を下降の側面に焦点づけていることは示唆的だが、実際には「分析」には対応する「統合」が、「分割」には対応する「総合」がそれぞれ存在しており、両者はそれぞれ個別事例から定義を「発見」し、得られた定義を「確証」する二つのプロセスを担うと言える。

ただし、仮設法の下降過程と「分割法」の確証過程とを比べると、そこには微妙な視点の違いがある。すなわち、仮設法での下降過程では、「仮設としての定義が正しいならば、それが説明すべき個別事例を包括的にカバーできるか」という点を主たる検証基準とするのに対し、後期対話篇で展開される「分割」の方法では、「すでに得られた定義を、同系統の類似対象との比較や分類を通して整合性を確かめる」という作業が中心となる。言い換えれば、仮設法は定義と個別事例との対応関係に注目するのに対し、分割法は定義が他の近縁対象とどのように区別され得るかを視野に入れる。こうした違いから、後期に至るにつれて、プラトンの焦点がより大きな分類体系や本質間の相互関係へとシフトしたことが読み取れる。

このように見ると、中期対話篇から後期対話篇への移行は、両方法論が断絶しているというより、定義を考究するうえで「それぞれの種類の諸事例とその本質」から「本質同士の関係や区別」へと、検証の軸が大きく移行したと捉えることができる。実際、アルキノオスは「総合」という語を積極的には用いず「分割」を中心に論じており、また『ソフィスト』以降の議論でも「分割」が重視される点は、後期プラトンが本質間の関係や分類に強く着目している傾向を示唆する。一方で、中期に見られる仮設法の上昇的視点が消え去ったわけではなく、後期には「総合」として継承され、「分割」を下支えするもう一つの対の方法として機能しているのだ。

以上のことから、アルキノオスの解釈は、プラトンの中期から後期にかけての問答法が、単なる方法の変更や対立によって説明されるのではなく、定義獲得の「上昇」と「下降」の両面においていっそう体系的・包括的な探求へと展開していることを示す、一つの興味深い手がかりとなるだろう<sup>23</sup>。

### 【後記】

本稿はもともとセミナーでの発表原稿を加筆・修正したものであり、その際には多くの

---

<sup>23</sup> 本研究は JSPS 科研費 JP23K12008 の助成を受けたものです。

貴重なご質問やご意見を頂戴いたしました。たとえば、プラトンが「総合」を表すために用いたギリシア語（*συνφορά* や *συναίρέω*、*συνάγω* など）の間に意味の違いがあるのか、「分割」が定義を「発見」するためではなく教示的手続きとして機能するとは具体的にどういうことか、といったご質問です。また、アルキノオスの資料をプラトン解釈としてどの程度真剣に受け取るべきかという問題や、「仮設法」と「総合と分割法」をパラレルに論じることが本当に妥当なのか、さらには上昇過程をアブダクションという言葉で簡単にまとめてしまうとプラトンの議論の要点を見失うのではないか、といったご指摘もいただきました。その他にも多くの示唆に富むご意見を頂戴しましたので、本稿では可能な限りそれらを反映するよう努めました。いただいたご質問のすべてを取り上げることは叶いませんでした。

今後は、「仮設法」と「総合と分割法」の関係をより大局的な観点から改めて検討するなかで、こうした問題提起に真正面からお応えできるよう研究を続けてまいりたいと考えております。貴重なご質問やコメントをくださった皆さまに、あらためて深く感謝申し上げます。

## 文献表

- Bailey, D. T. J., (2005), 'Logic and Music in Plato's *Phaedo*', *Phronesis* 50, 95–115.
- Behboud, A., (1994), 'Greek Geometrical Analysis', *Centaurus* 37, 52–86.
- Benson, H. H., (2010), 'Collection and Division in the *Philebus*', in T. M. Robinson and L. Brisson (eds.), *Plato's Philebus: Selected Papers from the Eighth Symposium Platonicum*.
- Benson, H. H., (2015), *Clitophon's Challenge: Dialectic in Plato's Meno, Phaedo, and Republic*, Oxford University Press, New York.
- Bluck, R. S., (1955), *Plato's Phaedo*, Routledge & Kegan Paul, London.
- Bluck, R. S., (1957), 'ὑποθέσεις in the *Phaedo* and Platonic Dialectic', *Phronesis* 2, 21–31.
- Bostock, D., (1986), *Plato's Phaedo*, Clarendon, Oxford.
- Boys-Stones, G., (2017), *Platonist Philosophy 80 BC to AD 250: An Introduction and Collection of Sources in Translation*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Cherniss, H., (1951), 'Plato as Mathematician', *The Review of Metaphysics* 4, 395–425.
- Cornford, F. M., (1932), 'Mathematics and Dialectic in the *Republic* VI.–VII. (I.)', *Mind* 41, 37–52.
- Cornford, F. M., (1957), *Plato's Theory of Knowledge: the Theaetetus and the Sophist of Plato*, Routledge & Kegan Paul, London.
- Dillon, J., (1993), *Alcinous: The Handbook of Platonism*, Clarendon Press, Oxford.
- Dorter, K., (2006), 'The Method of Division and the Division of the *Phaedrus*', *Ancient Philosophy* 26, 259–73.
- Friedlein, G., ed. (1873), *Procli Diadochi in Primum Euclidis Elementorum Librum Commentarii*,

- Teubner, Leipzig.
- Gallop, D., (1975), *Phaedo*, Clarendon Press, Oxford.
- Griswold, C. L., (1986), *Self-knowledge in Plato's Phaedrus*, Yale University Press, New Haven; London.
- Gulley, N., (1958), 'Greek Geometrical Analysis', *Phronesis* 3, 1–14.
- Guthrie, W. K. C., (1962), *A History of Greek Philosophy*, 6 vols. Cambridge University Press, Cambridge.
- Hackforth, R., (1952), *Plato's Phaedrus*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Hackforth, R., (1955), *Plato's Phaedo*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Hayase, A., (2016), 'Dialectic in the *Phaedrus*', *Phronesis* 61, 111–41.
- Heath, T. L., (1908), *The Thirteen Books of Euclid's Elements*, 3 vols. Cambridge University Press, Cambridge.
- Hultsch, F., ed. (1877), *Pappi Alexandrini collectionis quae supersunt*. Vol. 2, Weidmann, Berlin.
- Iwata, N., (2015), 'Plato on Geometrical Hypothesis in the *Meno*', *Apeiron* 48, 1–19.
- Iwata, N., (2016), 'Plato's Hypothetical Inquiry in the *Meno*', *British Journal for the History of Philosophy* 24, 194–214.
- Iwata, N., (2021), 'Socrates' First Voyage in the *Phaedo*', *History of Philosophy & Logical Analysis* 24, 243–267.
- Iwata, N., (2024), 'What is the Process of Division for?', in L. Brisson, E. C. Halper and R. D. Parry (eds.), *Plato's Sophist: Selected Papers of the Thirteenth Symposium Platonicum*, 99–106.
- Kahn, C. H., (1996), *Plato and the Socratic Dialogue*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Kanayama, Y., (2000), 'The Methodology of the Second Voyage and the Proof of the Soul's Indestructibility in Plato's *Phaedo*', *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 18, 41–100.
- Knorr, W. R., (1986), *The Ancient Tradition of Geometric Problems*, Birkhäuser, Boston Mass.
- Marcovich, M., ed. (1999), *Diogenes Laertii Vitae Philosophorum*. 3 vols, Teubner, Stuttgart.
- Nehamas, A. and Woodruff, P., (1995), *Phaedrus*, Hackett, Indianapolis.
- Robinson, R., (1936), 'Analysis in Greek Geometry', *Mind* 45, 464–73.
- Robinson, R., (1953), *Plato's Earlier Dialectic*, 2nd ed. Clarendon Press, Oxford.
- Rowe, C. J., (1986), *Phaedrus*, Aris & Phillips, Warminster.
- Rowe, C. J., (1993a), 'Explanation in *Phaedo* 99c6–102a8', *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 11, 49–69.
- Rowe, C. J., (1993b), *Phaedo*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Saito, K., (1995), 'Doubling the Cube: A New Interpretation of its Significance for Early Greek Geometry', *Historia Mathematica* 22, 119–37.
- Sayre, K. M., (1969), *Plato's Analytic Method*, University of Chicago Press, Chicago.

Stenzel, J., (1940), *Plato's Method of Dialectic*, Trans. D. J. Allan. Clarendon Press, Oxford.

Van Eck, J., (1996), 'Resailing Socrates' δεύτερος πλοῦς: a Criticism of Rowe's Explanation in *Phaedo* 99C6–102A8', *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 14, 211–26.

Waterfield, R., (2002), *Phaedrus*, Oxford University Press, Oxford.

White, N. P., (1976), *Plato on Knowledge and Reality*, Hackett Pub. Co, Indianapolis.

Whittaker, J., (1990), *Alcinoos: Enseignement des Doctrines de Platon*, Les Belles Lettres, Paris.

Yunis, H., (2011), *Phaedrus*, Cambridge University Press, Cambridge.

藤澤令夫 (訳) (1967) 『パイドロス』 岩波書店、東京。

中畑正志 (編) (2008) 『プラトン哲学入門』 西洋古典叢書、京都。